

雨の日文庫

現代日本文学・戦中戦後編

俘虜記

大岡昇平作

第4集 7

***雨の日文庫=4 <現代日本文学・戦中戦後編>**

***1967年9月30日 発行**

***1980年9月30日 4刷**

***監修者 阿部知二・小田切秀雄・佐々木基一・国分一太郎**

***発行者 布村哲夫**

***発行所 東京都文京区関口 3-2-1 有限会社 むぎ書房**
TEL (947) 4530 振替東京 5-27913

***印刷所 船舶印刷株式会社**

***装丁者 粟津潔**

虜記

昇平作・絵 中村宏



雨の日文庫第4集

7

わがころのよくてころさぬにはあらず

歎異鈔

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半分ほどの島である。軍事施設としてみるべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯を行うのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部及び西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一箇小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブラカオ西北パルアンにあった。サンホセ、パルアン間、つまり島の全長を蔽う約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼等は攻撃しては来なかった。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもってサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブラカオ背後の高

地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍は、ブラカオには上らなかつたが、小隊はサンホセの砲声を聞き、糧食、無線機と共に予め退避をしていたのである。糧食は豊富にあり、まもなく我々と合流した付近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なお三カ月以上を支え得るはずであつた。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散するまで、約四十日我々はここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては来なかつた。「奴等は怠け者だからこんなところまでやつて来やしないさ。そつちが来なけりゃこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだろう」と我々の当分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいったが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にじつとして居れば、戦いは我々の上を通過

して、ここは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があったからである。我々のような孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかった。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命を受け、度々十数名より成る斥候が組織され、十日或いは一週間、サンホセ付近の山中に潜伏して帰った。或る時彼等は米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見た状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操って魚を釣った湾内には、米内火艇が引掻いたような白い水脈を引いて疾駆していた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派

遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸しており、彼等を乗せた舟艇は以来行方不明であった。もっともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中から若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍に對する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持っていなかった。

しかし我々はその後も命令により幾度かブララカオに出張し、或いは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行った。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに來た不運な住民を拉致して帰った。こうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩される原因を作ったのである。

こうした絶望的状况にあつても、我々兵士は比較的吞氣であつた。我々は尽くその年初めて召集され、

三カ月の教育の後ここへ送られた補充兵であり、経験の欠如から事態の重大さがびんと来なかったからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日氣に病んでいられるものでもない以上、こうした無知は我々にとってむしろ一種天与の恩恵だったということとも出来ようか。我々は大部分私のような三十を越した中年の兵士であり、目の前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかった。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。氣候は既に乾季に入って雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のままでそのままの露営生活には手頃な陽気である。糧食も差当って不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのずから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも来たような氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる付近の土民

(これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い山地人で、戦争に無関心である)と馴れて、赤布、アルミ貨等を与えて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々はまた時々は麓に下り、飼主を失って彷徨する牛を射ってその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやって来た。マラリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島だそうである。しかし予防薬をとっていたため、サンホセに在る間は患者は二三名を越えなかったが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立って戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月の間には大体一日三人ずつ死んで行った。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その呑気な日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に

充滿^{じゅうまん}している病人^{びやうじん}を眺め、黙^{だま}って戸口^{とぐち}に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路^{たいろ}の開^{ひら}いていた間に、遮^{しや}二無^む二北上^{ほくじやう}してルソン島に渡^{わた}らなかったことにつき、中隊長の決意^{けつい}を非難^{ひなん}する口吻^{こうふん}を洩^もらした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部から面倒^{めんどう}な偵察^{ていさつ}の命令を受け、結局として病人が増^ふえて動きがとれなくなつたのである。下士官のエゴイズムである。しかしこの判断^{はんだん}にはルソン島を永久の安全地帯^{あんぜんちたい}と見做^{みな}す近視眼^{きんしやん}的前提^{ぜんてい}が含まれていた。かつてノモンハンの戦鬨^{せんごう}を見た中隊長が、比島派遣軍^{ひとうはせんぐん}の運命^{うんめい}についてかかる樂觀^{らうけん}的^{てき}予測^{よそく}を抱懷^{ほうかい}し得^えたはずはない。

彼は幹部候補生^{かんぶこうほせい}上りの若い中尉^{ちゆうゐ}で、二十七歳であつたが、無口^{むくち}で陰氣^{いんき}で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語^{かた}らなかつたが、その眼その顔には現^{あらわ}れていた。私は

彼の体にその僚友^{りやうゆう}の死臭^{ししゆう}を嗅^かぐようにさえ思つた。

「警備隊は警備地区をもつて墓場^{はかば}と心得^{こころえ}ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一遍^{いつぺん}の訓示^{くんじ}を行^いつていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿^{ひそく}しようとはしなかつた。サンホセから道案内^{みちあんない}した土民には、慣習^{かんしゅう}に反して食糧^{しきりやう}を与^{あた}え放ち歸^{かへ}らしめた。彼の言動^{げんどう}には一種の諦め^{あきらめ}があり、動作^{どうさく}はいわば過度^{かど}に緩慢^{かんまん}であつて、時齒^はの間から押し出すように弱^{よわ}く笑つた。犠牲者^{ぎせいしや}の笑いである。

彼は幾分^{いくぶん}進んで死を求めたようである。サンホセ駐屯^{ちゆうとん}中^{ちゆう}行^{かう}つた討伐戦^{とうはつせん}において、彼は常に先頭^{せんとう}に立つて戦い、決して自分を遮蔽^{しやへい}しなかつた。彼は自分では戦争の要請^{ようせい}を至上命令^{しじやうめいれい}として自分に課^かすることを許^{ゆる}しなから、それを部下に課^かすることについては自己の責任^{せきにん}を感じずにはいられない、あの心の優しい指揮者^{しきしや}の一人であつた。彼等^{かれら}は一般にただ自己の死によつてしか、

その部下に対する要求を正当化する手段を持っていな
い。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測
のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて最先に戦
死した。恐らく本望だったろう。

一種の共感から私はこの若い将校を秘かに愛してい
た。私もまた私なりに、彼とはかなり違った意味にお
いてであつたけれど、自分の確実な死を見詰めて生き
ていたからである。

私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国
をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部を憎んで
いたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も踏さな
かった以上、彼等によって与えられた運命に抗議する
権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴
力行使する組織とを対等に置くこつた考え方に私は
滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く
自己の愚劣を嗤わないためにも、そう考える必要があ
る。

つたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、
下の方を動いて行く玩具のような連絡船の赤や青の灯
を見ながら、奴隷のように死に向つて積み出されて行
く自分の惨めさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」
という観念に安住し、時局便乗の虚言者も、空しく談
ずる敗戦主義者も一茶げに嗤つていたが、いざ輸送船
に乗ってしまうと、単なる「死」がどつかりと私の前
に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別
れを告げる人はあり、別れは実際辛かったが、それは
現に私が輸送船上にいるという事実によつて、確実に
過ぎ去つた。未来には死があるばかりであるが、我々
がそれについて表象し得るものは完全な虚無であ
り、そこに移るのも、今私が否応なく輸送船に乗せら
れたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私

に何の思い患うことがあろう。私は繰り返してこう自分にいい聞かせた。しかし死の観念は絶えず戻って、生活のあらゆる瞬間に私を襲った。私は遂にいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死を控えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の観念はしかし快い観念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を眼で食った。私は死の前にこうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入ってから自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性の秩序が取って替ったが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確実なしであると思われるた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な変化が私の中

で起った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する気になった。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われるた。

明らかにこれは周囲に濃くなって来た死の影に対する私の肉体の反作用であつた。こうした異常な状態にあつて、肉体が我々をして行わしめるものは頗る現実的であるが、その考えさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。滋野は或る漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だったが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切っていた。彼の夢は前線

の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っている
と判断し、「こんな戦場で死んじやつまらない」と思
った。

この言葉は私にとって一種の天啓であつた。この死
を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞
にすぎないことに私は突然思い当つた。こんな辺鄙な
山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬ
のは、「つまらない」、ただそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計画を立てた。その計画と
はこうである——いずれ我々が米軍によつて現在地を
逐われるのは確実として、何とか敵中を潜つて西海岸
に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して
島伝いにボルネオに遁れる（この際私が海水浴場で覚
えた帆船走術が役立つはずであつた）。私はボルネオも
安全とはいえないから、いっそ南支那海を突切つて仏
印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧
と航海技術の関係で不可能だから、次善を選ぶほかは

あるまいといった。

帆船が得られなかった場合、我々は再び山に籠り、
草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は昔読ん
だ「ロビンソン・クルーソー」の細目を語り合い、土
民に木から火を起す方法を学んでおいた。

この計画はいかにも空想的であるが、我々はその実
現の可能性を少しも疑わなかつた。

我々は繰り返し計画を検討し、日に三人誰かが死ん
で行く中で、墓掘人足のように快活であつた（我々は
実際墓穴を掘つた）。我々の最も身近な敵、マラリアに
罹つた場合を考慮し、現在残つた唯一の対抗法、つま
り予め体力を貯えることに全力をあげた。我々は病人
の残した粥を食べ、土に落ちた飯粒も拾つて食べた。

我々はこうしてあらゆる場合に備えて周到に計画し
ていたにも拘らず、ただ我々がマラリアで発熱してい
る丁度その時、米軍がやって来る可能性に想到しなかつた。

二人共申し合せたように一月十六日に発熱した。私は毎日四十度の熱が続き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかったが、熱は毎日三十九度以上出た。

最初の試練が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の体は強健ではなかったが、病に対して比較的抵抗力があるのを知っていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがその時の私の考えであった）一切食べないことにした。半月位食えずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯えてあると、私は自負していたのである。

衛生兵は山へ入ってから奇妙なマラリア療法を説明していた。つまりマラリア患者は水を呑んではいけないというのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、断固として反対した。あらゆる論拠をあげて、禁

止の無意味なることを証明した。分隊長は怒って兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、或いは自分で十間ばかり離れた泉まで匍って行って水筒に汲んだ。

私は死がマラリア患者を急激に襲うのに気がついて、私は死は絶えず自分の体の状態を監視し、まだ死に、つけないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを知って、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍い出して小便を試みた。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱して少しくなつたと思われた一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。帰って小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪んでいるのを認めた。翌朝彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方発病後初めて少量の粥を摂った。その時展望哨が米船三隻がブララカオ湾内に入るのを見たと言えた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかった。帰っても不機嫌に横になったきり何もいわなかった。我々は通りすがりの兵士から、直ちに四名の斥候が出たということ聞いた。

翌朝眼がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなっているのを、不思議な気持ちで眺めたのを憶えている。私は漠然とその払暁米軍が来るかなと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかった。夜私は分隊長に「今日米軍が来なかったところを見ると、僕達は包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人の癖に生意氣いうな」といった。

次の日は一月二十四日である。この払暁また一組の

将校斥候が出た。六時頃一人の兵士が帰って、一行は麓で米兵に襲撃され、将校は戦死したと言えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は支度しろといった。そして彼自身も支度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで恢復していたが、分哨まで十五軒の道は自信がなかった。その先まだただけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残った。滋野は行くつもりらしく支度を始めた。私は外へ出て、何となく小屋の周りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋の下へ腕を入

れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒にいこう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一緒に行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼は黙っていた。

各自押し黙って支度をした。別れの言葉は交されなかった。

出発の時になった。私が皆に随いて歩き出そうとすると、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ないようにながら「大岡、残るか」といった。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏いになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答え、銃を下した。

滋野は何故かこの時先発して私の見えないところまで上っていた。その時の状況では彼を呼び返す気は起らなかった。こうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいわずに別れてしまったのである。

この退避組は全部で六十名余りになったが、二軒は

かり行ったところで襲撃され、ちりぢりになった。米軍はこの時既に完全に我々を包囲していたのである。

滋野はその晩まで分隊長と一緒にいたが、翌朝落伍していたそうである（こういうことを私は後で私と同じ俘虜収容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士と共に一カ月ばかり山の中をさまよった後比島人に捕えられた。彼はその手に残っていた手榴弾を投げなかった）。

残った者の取るべき行動については、何の命令も与えられていなかった。兎に角各自靴を穿き、脚絆を巻き戦闘準備をして横になった。

私はこの時分隊で一番重い病人であったから残るのは当然として、他の三人が発射した連中と比べて、特に悪い状態にあるとは見えなかったのは意外であった。

一人は衣川という有名な大正の講壇批評家の息子で会社員であった。彼は常々命令された最少限度を行う

という頗る消極的な勤務振りを示し、上官の受けはよくなかった。衣川は珍しい姓であったから、私は或る時彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類じゃねえ」と噀んで吐き出すようにいった。それは「親類じゃねえ、赤の他人だ」とは受け取れない妙な返事であった。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気に入らなかったから追求しなかった。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をした時、彼も足を傷めて班内にいたが、飯盒に水を汲んで来て丁寧に私の頭を冷やしてくれた。その看護には女のような奇妙な優しさがあり、彼の普段の人に馴れないエゴイスチックな態度とは似合わなかった。私が

前の質問を繰り返すと彼は素直に次男だといい、問わず語りに彼の父が震災で不慮の死を遂げてから後の、一家の歴史を細々と語った。以来我々は友人となった。しかし彼は私と滋野の脱出計画を冷笑していた。彼ははっきりしたマラリアの症状を示さず、仮病じ

やないかという者もあった。少なくとも出掛けた滋野よりは遙かにいい状態にあったのは事実である。彼は口を曲げて「行っちゃって残っちゃって同じことさ」といった。彼は心は優しいが、幾分自分を粗末にする男だったようである。

他の一人は土木師であった。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、屢々上等兵の勤務をとった。私は彼を阿諛者として嫌っていたが、山へ入り最早序列も昇進も問題でなくなった後も、依然としてよく働き、進んで重い物など担いだ。そして恐らくそのため分隊で一番先に病人となったのである。私はこの齢になっても、まだ人を見る目に誤りがあるのを秘かに愧じた。彼はもう熱はなかったが、多分体が見掛け以上に弱っていたのであろう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはっきり意志表示をせず、ただ皆が出掛けた後で、見たら彼がそこにいたというにすぎな

い。彼はべそをかいたような顔をして、脚絆も巻かず
に壁に向いて寝てしまった。

時刻は残留者が誰も時計を持っていなかったの
で、はつきりしたことはわからない。私は通りがかる兵士
に飯盒に水を汲んで来て貰い、何度もそれを水筒に詰
めようとして、億劫で止めたのを憶えている。物音は
なかった。兵士もだんだん通らなくなった。

突然、谷の下の方から三発の鈍い発射音が聞え、少
し間をおいて中隊本部の山の上で、三発の澄んだはじ
けるような音がした。

小銃の音ではなかった。私はそれまで迫撃砲の音を
聞いたことはなかったが、何故かこの時迫撃砲ときめ
てしまった。しかも弾着を見るための試射の音である
と思われた。

皆起き上った。表情のない顔であった。「来たらし
い——兎に角上まで行ってみようか」と私はいった。
皆「うん」と答えて身動きを始めた。

私は飯盒の水を水筒に移そうとした。手が震えて水
は外へこぼれた。私は「死ぬのに水は要らねえや」と
呟き、飯盒を遠く投げ飛ばした。

私の友人は屢々私が事にあたって見切りがよすぎる
と非難したが、私が今日生きて帰ってこんな文章を書
いていられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたと
いう一事に懸っている。

私はなるべく身軽に身をこしらえて外へ出た。弾入
も一個しかつかなかった。その時の私の感じでは、私
の生命はその三十発を射ち尽すまでは持たないのであ
る。

他の三人はまだ中でごそごそやっていた。私は中隊
本部まで一町の坂道を上れるかどうか自信がなかつ
た。私は「先へ行くぜ」と声をかけて歩き出した。

「一緒に行かないのか」と衣川が不服そうにいった。
私は「歩けるかどうかかわかんないから、先に行く。多
分途中で待ってるよ」といい棄て、銃を杖に狭いジグ

ザグの坂道を上り始めた。これがこの連中（れんちゆう）の見収め（みせま）になった。身ごしらえに手間（てま）どっていた彼等は、一人もこの米軍（べいぐん）の砲撃（ほうげき）正面（しょうめん）となった谷（や）から出られなかった。私は不思議に歩いて途中（とちゆう）中休み（ないうちどまり）なしに上り切ることが出来た。上ではみんな活発（かつぱつ）に動いていた。二三人ずつ隊伍（たいぎ）を組み、緊張（きんちやう）した顔を連ねて、無言（むごん）で右左（みぎひだり）に招（ま）れ違（ちが）っていた。私は稜線（りやうせん）を越えたところにある一つの分隊（ぶんたい）小屋（こや）に入（い）って腰（こし）を下（くだ）した。二三人の病兵（びやうへい）が銃（じゆう）を抱（か）き、顔を歪（ゆが）めて横（よこ）たわっていた。

途端（とたん）に小屋（こや）は炸裂音（さつれつおん）に包（つつ）まれた。私は反射的（はんしゃてき）に小屋（こや）を出（で）て弾（たま）の来（き）る方角（ほうかく）へ伏（ふ）せた。今（いま）私が上（あ）って来（き）た谷（や）の方角（ほうかく）である。炸裂音（さつれつおん）は続（つ）いた。「前（まへ）へ出（で）ろ、前（まへ）へ出（で）ろ」という声（こゑ）が聞（き）えた（この時（とき）私（わたし）達の位置（いち）から十米（じふメートル）後（ご）方の衛兵所（べいへいじよ）に弾（たま）が落（お）ちて、一人（ひとり）の兵士（へいし）が大腿骨（だいたいこつ）を碎（くだ）かれたのである）。私は匂（ほ）って前（まへ）にじり出（で）た。炸裂音（さつれつおん）はなお前方（きやうほう）で激（はげ）しくしていた。私は前進（ぜんしん）を中（ちゆう）止（し）した。「前（まへ）へ出（で）ろ」の声（こゑ）は続（つ）いた。

中隊長（ちゆうたいさ）が出（で）て来（き）た。彼は背負（せお）った鉄兜（てつたう）の上（うへ）から上衣（うわぎ）を羽織（はおり）、偏袒（へんたん）のような恰好（かっこう）をしていた。彼は「賑（にぎ）やかでいいじゃないか」と笑いながら双眼鏡（そうがくめい）を持（も）ち添（そ）え、弾（たま）の来（き）る方（かた）へ、映画（えいが）の画面（がめん）を横切（よこぎ）る人（ひと）のよう（よう）に歩いて消（き）えた。これが私が彼（かれ）を見（み）た最後（さいご）である。

二十人（にじゅうにん）ばかりの兵（へい）がそこら（そこら）に伏（ふ）せていた。私は隣（とな）りの兵士（へいし）と顔（かお）を見（み）合（あ）せた。熱病（ねつびょう）患者（かんじや）らしく蒼（あお）くふくれていた。その顔（かお）も笑（わら）っていた。

弾（たま）はまた一（いち）しきり激（い）しくな（な）って依然（いぜん）前方（きやうほう）に落（お）ちた。それから止（と）んだ。

「隊長殿（たいさうだんの）がやられた」という声（こゑ）がし、「衛生兵（えいせいへい）」と呼（よ）ぶ声（こゑ）が続（つ）いた（この衛（ゑい）生（せい）兵（へい）も後（ご）で収容所（しゆうようじよ）で会（あ）ったが、彼は中隊長（ちゆうたいさ）の屍（しかばね）を見（み）付（つ）けることが出来（こ）なかつたという）。

先任軍曹（せんじんぐんそう）が来（き）て、「病人（びやうじん）は谷（や）に降（お）りろ」といった。私は今（いま）しがた休（やす）んだ小屋（こや）へ行（い）って病兵（びやうへい）を促（うなが）した。彼（かれ）等は私が最初（さいしょ）入（い）った時（とき）と同じ姿勢（しせい）で寝（ね）ていた。そして